

果実吸蛾類(夜蛾類)の対策について

果樹試験場病害虫研究担当 白石祥子

近年、果実吸蛾類(夜蛾類)の発生が多く、ナンやモモ、カンキツでの被害が確認されています。園外から夜間に飛来、加害するため、対策が難しい害虫ではありますが、今後の被害をおさえるための参考となるよう、その生態と対策について説明します。

I. 果実吸蛾類(夜蛾類)の生態

果実を吸汁加害する果実吸蛾類(一般的には夜蛾と呼ぶことが多いため、以降は夜蛾類とします)は数多く記録されていますが、本県で特に問題となる種は、アケビコノハ、アカエグリバ、ヒメエグリバの3種です。

幼虫(写真1)は、主に山野に自生するカミエビ(アオツヅラフジ)、アケビ、ムベといった「つる性」の植物を餌としており、これらを食べて成長します。



写真1 夜蛾類幼虫(左:アケビコノハ 中:アカエグリバ 右:ヒメエグリバ)

成虫(写真2)になると果樹園地に飛来して、果実を加害します。「夜蛾」と呼ばれるとおり夜間に活動する蛾であり、日没から明け方まで果樹園へ侵入・加害しますが、特に日没1時間後~24時頃までに飛来する個体が多いとされています。明るくなる前に山野に戻っていくので、果実を加害しているところを目にすることはほとんどありません。夜蛾類の成虫はほぼ1年中発生していますが、夜温が高いほど活動が活発となり、果樹園への飛来数が多くなります。夜温が低くなると飛来数が減り、12~13℃以下になると激減、10℃以下では飛来しなくなります。



写真2 夜蛾類成虫(左:アケビコノハ 中:アカエグリバ 右:ヒメエグリバ)

成虫は、鋭くとがった口吻の先端で果皮に穴を開けて果汁を吸汁します。収穫が近い熟した果実を主に加害しますが、皮の硬い幼果でも加害することがあります。加害された果実には小さな穴が開き、傷から菌が入り、腐敗します。(写真3)。



写真3 夜蛾類による果実被害(左:ナシ 右:温州ミカン)

II. 被害発生要因と対策

1. 近年の気温上昇の影響

近年の気温の推移(最低気温)を見てみると、5月～10月頃は果樹園への飛来に適した温度であるといえます。特に近年は9月～10月の最低気温が平年よりも高く、夜蛾類の活動が秋の遅い時期まで活発になっていると考えられます(図1)。

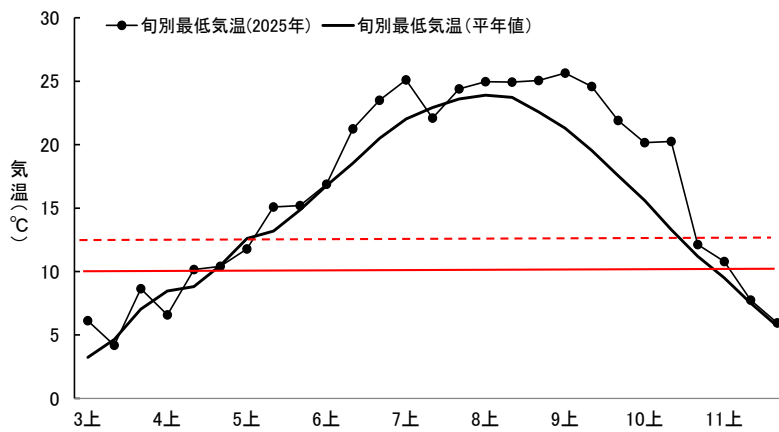


図1 3月～11月の旬別最低気温の推移(2025年および平年値, 佐賀県果樹試験場)

2. 被害が発生しやすい園の条件

本虫は山野に生息し、果樹園へ飛来してくるため、生息地である山野に近い園で被害が多くなります。加えて、同一園地でもより山野に近い側での被害が大きくなります。夜蛾の被害で悩んでいる方は、周辺に餌となる植物が生えていないか、果樹園周辺を探してみてください(写真4)。特に、カミエビはつる性の植物で、様々な場所に生えていますので、園地近辺に多く生えている可能性があります。



写真4 夜蛾類の食草(左:カミエビ 中:アケビ 右:ムベ)

3. 防除対策

1) 耕種的防除法

- ・果実の腐熟した匂いに誘引されるため、夜蛾類の被害果は園外へ持ち出し処分しましょう。
- ・園内外の幼虫の餌となる植物（カミエビ、アケビ、ムベ等、写真4）は可能な限り除去し、発生源を減らしましょう。

2) 物理的防除法

(1) 防虫ネットによる園内への侵入防止

目あい6ミリ以下の防虫ネットは、本虫の侵入防止に効果的です。

(2) 防蛾灯の設置

本虫は夜行性であることから、一定以上の明るさがあると活動を停止します。そのため、防蛾灯で園内を明るくすることで被害を抑えることができます。被害を抑えるには、**園内くまなく**1ルクス以上の明るさが必要となります。明るさは十分か、明かりが届かない部分が無いか、確認しましょう。

点灯は、夜蛾類が園内へ飛来してくる時間に合わせる必要があります。つまり、日没から日の出まで、切れ目なく点灯させましょう。

(3) 新たな物理的防除法

新たな防除技術として、「超音波」を用いた防除について、国やいくつかの県で試験されています。これは捕食者であるコウモリが発するものに似た超音波を機械から発することで、夜蛾類がこれを忌避する習性を利用して園内への飛来を防ぐ技術です。

一部では効果が認められていますが、園の立地や広さでの効果の違いなど、検討すべき事項がまだ多くあります。しかし、登録農薬が少ない現状では、有効な防除手段の一つとなる可能性がありますので、現地に導入できそうな技術が確立された際には、情報をお伝えしたいと思います。

3) 薬剤防除法

被害の多発を防ぐためには、果実の被害（写真2）に早く気づいて、対策をとる必要があります。園内をよく観察して、被害を確認したら早急に防除を実施します。ただし、薬剤の残効は短いため、散布後も被害の発生状況を確認しながら、使用回数や使用時期（収穫前日数）に注意して防除を実施しましょう（表1）。

表1 登録薬剤一覧(かんきつ及びもも)

作物名	IRAC コード	薬剤名	希釈倍数	使用時期	本剤の 使用回数
かんきつ	3A	ロディー乳剤	2,000倍	収穫7日前まで	4回以内
		アグロスリン水和剤			3回以内
もも	3A	ロディー乳剤	1,000～	収穫前日まで	5回以内
		アグロスリン水和剤	2,000倍		